

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第33回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

神岳かむかに登りて、山部宿禰赤人の作れる歌一首并に短歌（巻第三 三三五番歌）

あすかがは
明日香河川淀さらず立つ霧の

思ひ過ぐべき恋にあらなくに

小春日和の穏やかな陽に誘われて、自分が幼い頃育った町にまた、生まれたばかりの娘を抱いて、初めての遠出だ。ようやく座った首を左右に振り、興味津々と周りの様子をうかがっている。通りでは、最後まで粘っていたプラタナスの枯れ葉が舞い降りてきて、道行く人を驚かせている。分かりもしないのに、一応やさしく解説してみた。ここが河原へのマラソンコースだったの。もう少しで、おいしい和菓子屋さんがあるはずなんだけど。あ、通っていた中学校の門。友だちとおしゃべりして何気なくあこがれの人を待ったりしたっけ。・・・やはり娘は、母の感慨とは全く関係のないところを見ている。

「ふるさととはどちらですか。」と聞かれて、いつも答えに困った。出身地を尋ねられれば即答するが、「ふるさと」と言われると何か特別の思いが無くてはいけない気がして考えてしまう。中学まで何度か転校を繰り返して、慣れた頃には次の土地へと移り住んだ。だから、心の中でふるさとを決めかねていた。なぜか、今日は違う。景色が次々と語りかけてくる。恥ずかしかったこと、うれしかったこと、せつなかつたこと。この町には、まだ、子どもの自分が生きている。あの頃の自分がその通りから土手の向こうから駆け出してきそうって、思わず立ち止まった。

作者・山部赤人は、はつきりと心の故郷をもっていたようだ。都

は藤原京へと遷ってしまったが、ここ神岳に登れば、広がる景色は山高く、河は雄大に流れている。明日香旧都は春の日には山をのぞみ、秋の夜は川音さやけく、朝雲に鶴が乱れ飛び、夕霧に河蛙が鳴きしきる。眺めるたびに思わず涙が流れる。昔を思えば・・・という長歌のあとにこの歌がくる。「明日香川の川淀に立つ霧のように、私の旧都を思う気持ちは簡単に消え去ってしまうようなものではないのだ」と。自然の中において、その美しさが言葉を超えて語りかけてくる。時が経ち、花の盛りが過ぎよつとも、山が川が変わらぬ景色が胸を打つ。山部赤人は、自然の中に身を置いて、ひたすら自然を感じ、歌に詠んだ歌人だ。奈良県明日香村の飛鳥寺境内では、佐佐木信綱書の歌碑が堂々とした風格で訪れる者を迎えていた。昔というのは消え去るものではなかった。ふるさとは確かにあの頃の自分がいて、今日までの道程を示してくれる。悲しみに何も見えなくなった日も、山も川もそこに変わらずいることで、自分を包んでいたのだった。人は言う、「あのとき」があるから今がある、と。

ふと見ると、娘はすやすやと気持ちよさそうに眠っていた。さあ、帰ろう。いつかあなたの「ふるさと」になるわが家へ。



奈良県明日香村飛鳥寺境内